

## 認知的観点から見た格助詞デの意味構造

### 1. はじめに

日本語学習者にとって、格助詞の習得は容易ではない。中でもデは(1)に示すように多義であり、学習をさらに難しくしている。

- |   |                   |
|---|-------------------|
| (1) (a) 太郎が <u>新幹線</u> で福岡へ出張した。        | [道具]              |
| (b) 花子が <u>ミス</u> の連続で演奏会を滅茶苦茶にした。      | [原因]              |
| (c) <u>ハワイ</u> の教会で太郎が花子に指輪をはめた。        | [場所]              |
| (d) <u>この数年</u> で携帯電話の普及率は劇的に増加した。      | [時間]              |
| (e) この工場では <u>輸入オレンジ</u> で缶ジュースが作られている。 | [材料]              |
| (f) 1台の車が <u>猛スピード</u> で走り去った。          | [様態] <sup>1</sup> |

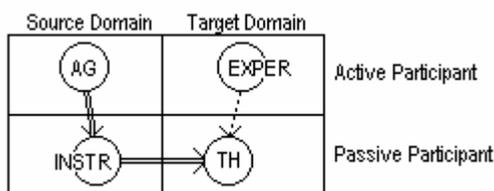
今まで日本語教育ではこうした多義語の意味を教えるにあたり、意味相互間の関係について言及することは少なく、具体的な例文を提示しつつ教えることが多かった。そのため学習者に対し、それらの意味をただ丸暗記させる結果ともなっていた。またこれまでの言語理論においても、その多くは意味と形式の対応について肯定はしつつも、同一の形式の下に置かれた多義語の一つ一つの意味がどのような関係で結びついているのかについてはあまり言及をしてこなかった。しかし認知言語学では、同じ形式は同じ意味を共有し、形式の違いは必ず意味の違いを伴うというBolinger(1977)らの考え方が最大限に尊重され(もちろん英語のbankのような同音異義語の存在も否定しない)さらには同一の形式の下にまとめられた意味の内部構造を明らかにしている<sup>2</sup>。即ち多義語の個々の意味は核となるプロトタイプ的な意味から動機づけられて拡張したものとされる。本稿で扱う格助詞デも同様で、(1)の様々な意味は同じ意味を共有しつつネットワーク構造をなし、相互に関係し合っていると考える。しかも認知言語学では、これらの動機づけやネットワーク構造、意味と形式との一対一対応といったものを、実際に脳内で起こっている認知のプロセスに即したものと仮定している。従ってもしこの主張が実際の認知プロセスに合致したものであるとすれば、それは習得が困難な多義語の意味習得に大いに役立つことが期待できる。またLangackerによる多義語の意味の特徴づけはスキーマの意味とプロトタイプの意味の両面から補完的に行われ、より明確なものとなっている(Langacker 1991b : 266-272)。

以上のような理由から、本稿では認知言語学的な観点を参考にし、教育的動機から、格助詞デの意味のネットワークについて考察する。

### 2. 先行研究

認知言語学的な観点をを用いた格標識の分析としては、まず何よりもLangackerの研究を挙げることができる(1991a, 1991bなど)。これらでは特に主格、具格、対格、与格などを中心とした分析がなされ、それらはプロトタイプとして、認知的に前景となる動作連鎖の参与者としての行為者、道具、被影響者(主題)、経験者という意味・特徴づけが可能であるとしている(図1参照)。しかし彼の研究は動作連鎖を構成する参与者のプロトタイプ的な意味とその格標識との関係が中心で、そのため日本語のデ格については道具を表す具格としての用法に限られてしまい、デ格のその他の意味に関わる言及はあまり見出せない。

図1 二重目的構文の動作連鎖 (Langacker(1991a; 327) 図 7.5)



一方日本語の格助詞デの意味について研究した論文には、赤羽根(1987)、城田(1993)、仁田(1995)など様々なものがあるが、その多くはデの意味を綿密に分類したり、他の格助詞との比較の中で意味の違いを説明したりしているもので、デの持つ様々な意味同士の構造や結びつきについて言及しているものは、菅井(1997, 2001)、山梨(1993)、間淵(2000)など、認知言語学的な観点から論じたものが多い<sup>3</sup>。

まず菅井(1997)ではデ格の意味特性について、認知言語学的な観点からの解明が試みられている。デ格には道具、原因、場所、時間、材料、様態などの様々な意味・用法があるが、菅井(1997)ではこれらに対し単一の意味特性の導出が試みられ、「主格または対格に対する背景的側面の提示」であるとしている。そしてその上で、「デ格は主要な格成分との関係が動詞によって表される事象を通じて変質しない」としている。例えば(2)(a)では、ガ格とデ格との関係は「太郎=課長」のまま一定している。これは二格が用いられている(b)でガ格と二格との関係が<- 課長>から<+ 課長>へと変化するのとは対照的である。またこのことは、ヲ格とデ格との関係にも見られ、例えば(3)において「新車=80万」「代金=ドル」の関係は事象を通して変化しないとしている。

場所のデ格では(4)のように行為の空間的限界を示し、事象を通じてガ格とデ格の関係(ガ格がデ格で表された場所に所在するという関係)は不変であるという。これに比べ場所の二格はガ格の所在をその内に限定しない((b)では最終局面だけが所在している)。

さらに(5)で、[原因]を二格で表した場合、(b)のように原因と結果の間に時間的間隔があくと不自然なのに対し、デ格で表した場合には不自然でないのも、デ格の場合にはガ格との関係が事象を通じて変化しないからであるとしている。

- (2)(a) 太郎が課長で終わった / 退職した / 出向した。
- (b) 太郎が課長になった / 昇進した / 就任した。
- (3)(a) 太郎が新車を80万で買った / 売った。
- (b) 花子が代金をドルで支払った / 計算した。
- (4)(a) 太郎が公園で散歩する / 逃げ回る / 生活する / 調査する。
- (b) 太郎が故郷に帰省する / 行く。
- (5)(a) 母親があまりのショックに / で寝込んだ。
- (b) ?そのショックに母は翌日から1週間も布団から出られない状態が続いた。

そのショックで母は翌日から1週間も布団から出られない状態が続いた。

菅井(2001)ではデを含めた日本語の格助詞の体系化が試みられ、結論として(6)のように、動詞によって表される事象において「カラ格」「ヲ格」「二格」が各々「始まりの部分」「始まりと終わりまでの間」「終わりの部分」をプロファイルするのにに対し、「デ格」は



### 3. デ格の意味特性分析

本稿では先行研究を参考にしながら、格助詞デの意味構造についてさらに考察する。

まずLangacker (1991a, 1991b)の動作連鎖により、格標識の意味が表されうる日本語のデ格は、上述したように[道具]を表す具格に限られる。Langackerによれば、具格は道具として、図1に示されるように源泉領域の受動的参与者であり、主格(源泉領域の能動的参与者)からの動力を対格(目標領域の受動的参与者)へと伝える。しかし厳密に見ると、主格からの動力を対格へと伝える動作連鎖の参与者となりうるのは、あくまでも(7)のような[道具]であり、菅井(2000)では[道具]としている(1)(a)のような[手段]は該当しない。両者の違いは、[道具]が[行為者]と[被影響者]の間であって、[行為者]からの動力を[被影響者]へ伝える直接の参与者であるのに対し、[手段]は[行為者]と[被影響者]の間にはなく、[行為者]からの動力を[被影響者]へ伝える参与者となることができず、その結果動作連鎖を促す背景的な役割しか演じることができない点にある。例えば(7) 図2で動作連鎖は主格の「太郎」を起点、「コップ」を終点とし、「ハンマー」はその間で動力を「太郎」から「コップ」へと伝える媒介となっているのに対し、(8)ではデ格の「飛行機(航空便)」は、動作連鎖において主格の「彼」と対格の「手紙」の間にはなく、動力を主格から対格へ伝える媒介とはなりえていない(単に動作連鎖の結果として生じた移動を輸送という形で側面的に支えるのみである)つまり[道具]は主格から対格への動作連鎖の流れの中にあり、参与者の一員となっているが、[手段]はその流れの中にはなく、参与者の一員とはなりえず、動作連鎖に間接的、背景的にしか関われない点が異なっている。

(7) 太郎はハンマーでコップを割った。 [道具]

(8) 彼は飛行機(航空便)で手紙を送った。 [手段]

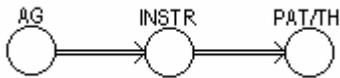
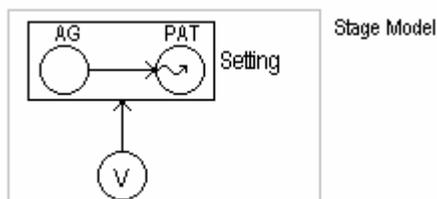


図2 「太郎はハンマーでコップを割った。」の動作連鎖

ではそれ以外の用法はどうか。前景となる動作連鎖の参与者となりえないとすれば、その役割は上で見た[手段]と同様、動作連鎖の背景的な役割を演じていることになる。

ここで前景、背景とは何かということについて明らかにしておく必要があると思われる。図3に示されているように、動作連鎖の前景も、また Setting としての背景も、認知する主体(V)からは独立して客観的に展開する状況が前提となって決定されていることは言うまでもない。しかし実際に状況を構成している動作連鎖は無数にあり、そのうちどれに焦点を当てて切り取り、前景化するかは、もっぱら認知主体の解釈に委ねられている(Langacker(1991b: 214-215)を参照)。同様に前景の Setting となる背景も、客観的な事態に基づきながらも、それを解釈するのはあくまで認知主体である。前景となるのはプロトタイプとして、図1で図式化された意味役割を持つ参与者であるが、背景を構成する意味役割とはどんなものなのか。まず第一に前景の動作連鎖(焦点化した事態)と密接に関わり、その成立基盤となっている、またはなっていると解釈される要因が背景として認知される可能性がある。第二には実際に存在する無数の事態の参与者のうち、前景としては認知されなかったもの、中でも前景化された動作連鎖に対し、何らかの役割を持って直接

図3 認知主体と前景・背景との関係 (Langacker (1991b: 211)より)



的に相関関係を結ぶものが背景として認知される可能性が高いであろう。

では具体的にどのようなものが背景として認知されるのか。まず前景の事態(動作連鎖)と密接に関わり、その成立基盤となっている、空間的ドメインの構成要因である[場所]や[時間]を挙げることができよう。(1)を例にとれば、(c)ではデ格の「ハワイの教会」が「太郎が花子に指輪をはめる」事態が行われる[場所]として背景(Setting)を形成している。また(d)ではデ格の「ここ数年」が「携帯電話の普及率が劇的に変化する」という事態と密接に関わり、それが成立するための[時間]的な背景(Setting)となっている<sup>4</sup>。

また同じようにデ格で表される[材料]、[原因]なども、前景となっている事態(動作連鎖)と密接に関わりつつその成立基盤となり、背景になりうると考えられる。(1)を例にとれば、(e)では「輸入オレンジ」が「缶ジュースを作る(缶ジュースが作られる)」事態が行われるための[材料]的な背景を提示し、(b)では「ミス連続」が「演奏会を目茶苦茶にする」事態の[原因]的な成立基盤(背景)となっていると考えられる。

しかし[様態]の場合には、事態の成立基盤というよりは、事態がどのようなさまで成立したかということに対する補足的な内容となっている<sup>5</sup>。

次に事態の背景の同定の客観性について述べておきたい。[場所]、[時間]、[材料]、[手段]などの場合には事態成立との関わりは、かなり客観的に同定されうる。ところが[原因]の同定の場合には、必ずしも客観的であるとは言い切れない面がある。すなわち背景としての[原因]の同定には認知主体の主観的解釈が多分に反映している可能性がある。例えば極端な例として、「風が吹けば桶屋がもうかる」といった意味での「風で桶屋がもうかる」の場合の[原因]の同定は、ほとんど認知主体の主観的解釈に基づくものである。

[様態]の場合はどうか。この場合にも客観的な事実関係に基づきながらも、やはり認知主体の主観が反映されている。[様態]とは単に「客観的にそうである」場合と同時に、認知主体にとって「そのように見える」さまを示している場合もある。例えば(1)(f)で「猛スピード」は「1台の車が走り去った」という事態がどのように展開されているかに対する、認知主体の半ば客観的で半ば主観的な解釈である。

このように背景となりうるものには、具体的に事態全体に密接に関わりつつ、その成立基盤となる[場所]、[時間]、[原因]、[手段]、[材料]、それに事態成立のさまを補足的に示した[様態]などが含まれると思われる。そしてこれらは[場所]や[時間]などのように、認知主体の主観的要因が反映しにくいものから、[原因]、[様態]などのように認知主体の主観的要因が相当程度反映されるものまで様々である。

このように見てくるとデ格とは、いずれも前景の事態(動作連鎖)全体に密接に関わり合っている成立の基盤やさまを補足的に示す背景格であることがわかる。

ここでデ格においては唯一背景格でなく、前景格とされている意味役割の[道具]について再度考えてみたい。確かに Langacker の分析では、具格は動作連鎖に含まれるものとして、前景格の一つとなっている。しかし具格となる[道具]は、図1が示すように源泉領域の受動的参与者である。また動作連鎖の参与者のうち、焦点が当てられるのは Trajector としての[行為者] (主格) として Landmark としての[被影響者(主題)] (対格) であり、その狭間に位置する[道具] (具格) は、動作連鎖を構成する一員とはいっても、焦点の当たりにくい位置に置かれている。しかも[道具]の意味役割を演じるものは、[行為者]の体の一部であったり、小さく、かつ一時的な媒介者であったりする場合がほとんどである。英語などの場合には、それでも焦点化し、その結果本来の行為者に代わって主語となることもあるが、日本語などの場合には、「ハンマーがコップを割った」といったように、[道具]が[行為者]に代わって主語になることはあまり多くはない。つまり日本語の具格は、むしろ焦点化の低さから背景の一つと考える方が妥当であるといえそうである。そう考えると、Langacker の主張とは異なるが、[道具]の意味役割を演じる具格も、他の[場所]、[時間]、[原因]、[手段]、[材料]、[様態]などのデ格同様、背景格として、前景の動作連鎖全体の成立の基盤やさまを補足的に示すものに含めて考えることができると思われる。

以上の考察をもとにデ格のスキーマ的な意味特性を導出するならば(9)のようになる。

(9) 背景格として前景の動作連鎖全体の背景(成立の基盤やさま)を補足的に示す  
菅井(1997)では、デ格の意味特性を「主格または対格に対する背景的側面の提示」としていたが、本稿では「前景を構成する(主格、対格、与格などの)動作連鎖全体に対する背景(成立の基盤やさま)の補足的提示」と言いかえている。

また菅井(1997)では先行研究のところ述べてのように、「デ格は主要な格成分との関係が動詞によって表される事象を通じて変質しない」といった特徴づけがなされている。しかしなぜそうなるのかという点に関しては説明がない。これについてもデ格が背景格として、前景の動作連鎖全体の背景を表すものであることを考えれば、自然と回答は出てくる。二格は前景を構成する参与者(またはそれに準ずるもの)としてガ格に対峙している。従ってガ格と二格の関係は、動詞が表す過程や変化により時間と共に漸次変化せざるをえない。ところがデ格は前景が成立する背景として存在するので、事態が展開する間、(2)(3)のように[様態]のデ格なら事態が展開する[様態]として、(4)のように[場所]のデ格なら事態の行われる[場所]として、(5)のように[原因]のデ格なら事態の起こった[原因]として、前景の諸要素に対して変わらぬ役割を果たし続けることができるのである。

さらに菅井(2001)でデ格が「動詞の語彙の意味に変化を被らずに限定する」と述べているが、それもデ格が前景ではなく、背景として存在するため、動詞を中心とした事態(動作連鎖)から独立し、しかも背景であるために、それを限定するのだと解釈できる。

一方間淵(2000)のデ格の意味特徴づけと比べると、本稿は前景・背景といった認知言語学的観点が生かされている。間淵(2000)の「状況の限定」「(事態への)消極的参与」といった(スキーマ的な)意味特徴は、デ格が背景格であるために生じたものと言えよう。

#### 4. 背景を形成する認知的ドメイン

さらに菅井(2001)では、背景的なデ格と、ガ格など前景的な主要格成分との関係につい

ては、(10)の例文の右に示されているように、デ格の意味役割を越えた特徴づけがなされておらず、それぞれ異なった特徴づけとなっている。しかし認知言語学的に考えれば、これらの関係にも共通性（スキーマ）を見出せなければならないように思われる。

- (10)(a) テラスで太郎が星をながめていた。 [場所] (デ格 ガ格)  
 (b) 早速、太郎が鉛筆でデッサンを書き始めた。 [道具] (ガ格 デ格)  
 (c) 成績不振で母親が子供をなぐった。 [原因] (デ格 ガ格)  
 (d) 行方不明の男性が遺体で発見された。 [様態] (ガ格=デ格)

ここで背景とは何かについて再度考えてみたい。(11)は前景を構成する「太郎はジュースを作った」という節に、異なるデ格を加えたものである。それぞれは前景には示されていない、様々な背景がデ格として示されている。これを見ると、背景として何を言語的に明示するかは、事態に背景的に関わる諸要因のうち、認知主体が何に焦点を当てるかにより異なっている。換言すれば、認知主体が前景を補足する背景として、如何なるドメインを選択するかにより、デ格が担う意味と、デ格で表される対象とが異なってくるのである。例えば認知主体が[場所]について補足しようとした場合には、[場所]といった空間的ドメインが選ばれ、(a)のように[場所]がデ格によって言語的に明示化され、その結果デは[場所]を表す格助詞として機能し、背景情報を補足するのである。

- (11)(a) 太郎は台所でジュースを作った。 [場所]  
 (b) 太郎は3分でジュースを作った。 [時間]  
 (c) 太郎はミキサーでジュースを作った。 [道具]  
 (d) 太郎はバナナでジュースを作った。 [材料]  
 (e) 太郎は学校の宿題でジュースを作った。 [理由]

要するにデ格とは、前景に対し事態成立の背景を補足的に明示するが、その具体的な意味役割は、認知主体が事態を捉える際に持つドメインにより異なってくるものだとすることができる。これを図に表せば、図4のようになる（図は認知主体が[原因]のドメインを選択した場合である。図右側の「ドメイン[原因]」は、認知主体(V)が[原因]のドメインを選択したことを、「背景格としてのデ格[原因]」は、背景格として原因のデ格が選択されたことを示す。その他のドメインが選択された場合も同様に決定される）。

菅井(2001)では、(10)の如くデ格の意味役割によってガ格などの主要格とデ格との関係が異なり、一貫した特徴づけには至っていない。これは次の2点が原因であると思われる。

第一に、デ格は「背景」格であるため「前景（全体）との関係」が考察されるべきであるところを、デ格と「主要格（主格または対格）との関係」を考察していること。

第二に、デ格は「認知主体が選択するドメイン」と「前景（事態全体）」との相互関係



図4 認知主体のドメインと動作連鎖の背景と関係

によりその意味が決定される点は共通であるが、その細かな関係は選ばれたドメインの性格により微妙に異なっていること。例えばドメインが[場所]、[時間]、[様態]の場合には、事態全体と関わりを持ってくるが、[原因]、[道具]の場合は[行為者]との関係が、[材料]、[手段]の場合は[被影響者]との関係が幾分直接的になってくるなどである。

本稿が主張してきたように、デ格を前景との相互関係の中で捉えるならば、デ格の個々の意味は認知主体の持つドメインにより背景情報として具体化されたものと考えられる。

そして一つの節に共起するデ格の数は(12)のように、大抵は1つ、または多くても2つ程度であると考えられるが、これは格の重複という観点から説明されてきたが、認知的に見れば、人間が一度に背景として認知しうるドメイン数の限界を意味しているものと思われる。(b)(c)は完全に非文とは言い難いが、人間が一度に認知するドメイン数の限界から、非文性が次第に増していくものと考えられる。

(12) (a) 太郎は台所でジュースを作った。

(b)? 太郎は台所で3分でジュースを作った。

(c)?? 太郎は台所で3分でミキサーでジュースを作った。

## 5. まとめ

以上、格助詞デの持つ意味構造について、最近の認知言語学の観点を取り入れつつ概観した。デ格は様々な意味を持っているが、それらの意味同士の具体的な相互関係や、それらに共通するスキーマなどについては、これまでほとんど認識されることがなかった。

しかし本稿では、デ格の個々の意味が共通のスキーマにより一つに結びついていることが示された。そのスキーマとは「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景(事態成立の基盤やさま)を補足的に示す」というものである。またデ格が表す具体的意味(場所、時間、道具、手段、材料、原因、様態など)は、図4のように「認知主体がどのようなドメインを持って事態に対するかにより主観的に選ばれ言語的に明示化されるもの」である<sup>6</sup>。

本稿で示されたデ格のスキーマはこれまで森山の先行研究で示されたヲ格や二格のそれに比べ、意味特徴が具体的に特定されておらず、相当にスキーマ的(抽象的)である。しかしそのこと自体が、背景的諸要因を補足的に示す、「背景格としてのデ格」の特徴であると思われる。ヲ格や二格は被影響者や経験者など、動作連鎖の参与者を表すものであるため、その意味特徴は比較的具體化されやすいが、背景格のデの場合には、認知主体が選択するドメインに大きく依存するため、そのスキーマの抽象度は相当に高くなるのである。

本稿の分析が正しいとすれば、共通のスキーマを中心としたデ格の意味のネットワーク構造は、前述したように人間の認知プロセスにおいて実際に脳内で形成され、言語習得のプロセスにも密接に関わっているはずである。その意味から認知言語学の観点を生かした本研究は、格助詞デの意味のネットワーク構造はどのようなものであり、それらの意味の習得順序はどうなっているのか、などの研究に多くの示唆を与えると思われる。そして日本語教育に対し、意味のネットワーク構造は格助詞の多義的な意味をどのように関連づけて提示していくかということに回答を示し、一方、習得順序研究はそれらの意味をどのような順序で提示していくべきかということに回答を示してくれると確信している。

<参考文献>

- 赤羽根義章(1987)「格助詞『に』と『で』について：文法指導の観点から」『日本語学』第6巻・第5号、pp.82-94.
- Bolinger, D. (1977). *Meaning and form*. London: Longman.
- Langacker, R. W. (1991a). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991b) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- 間瀬洋子(2000)「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』第51巻1号、pp.15-30.
- 森山新(2001)「認知的観点から見た格助詞デ・二の意味・用法の違いについて」『日本学報』49集、韓国日本学会、pp.95-106.
- 中右実(1998)「空間と存在の構図」中右実・西村義樹『日英語比較選書5・構文と事象構造』研究社出版、pp.8-54.
- 仁田義雄(1995)「格助詞のゆらぎ」『言語』第24巻・第11号、pp.20-27.
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろしお出版、pp.67-94.
- 菅井三実(1997)「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43) pp.23-40.
- 菅井三実(2001)「現代日本語における格の暫定的体系化」『言語表現研究』17、兵庫教育大学言語表現学会、pp.109-119.
- 山梨正明(1993)「格の複合スキーマモデル：格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろしお出版、pp.39-66.

<注>

- <sup>1</sup> (1)(11)の例文は菅井(1997)から引用した。
- <sup>2</sup> 意味と形式の対応は伝統的記号論の考えであるが、特に認知言語学は、Pinkerの語彙意味論のように意味の相違を語彙に還元したりせず、Bolingerなど機能主義的文法論の考えを作業仮説として踏襲するなど、意味と形式の一対一対応の原則を最大限重視している。
- <sup>3</sup> 仁田(1995)、城田(1993)では、デ格の意味の多様性に言及しているが、多義性を名詞や動詞の語義に帰結させている。
- <sup>4</sup> 但し場所や時間はデ格以外にも、例えば二格やヲ格でも表しうる。しかしこれについては森山(2001)で触れられているように、二格やヲ格で表された場合には、その場所や時間は、あたかも動作連鎖の一つの参与者のように主格と直接対峙するものとして前景的に認知されるのに比べ、デ格で表された場所や時間は、あくまでも前景をなす動作連鎖に直接には加わらず、その成立基盤として背景的に認知される点が異なっているといえる。
- <sup>5</sup> 様態のデは、断定の助動詞ダの連用形とするという考えもあり、もしそうだとすれば様態のデは同音異義語として、格助詞デの意味のネットワークとは分けて考える必要がある。
- <sup>6</sup> 本稿では具体的な意味のうちどれがプロトタイプであるかについては、紙面の都合で述べられなかったが場所格をプロトタイプとする間瀬(2000)を支持、踏襲するものとする。